

# みのかも定住自立圏キャラクター

ピンクでハート型のかわいい髪型。

かも地域がさらに美しくなりますように、との願いが込められて名づけられた。(一般公募にて命名)

野菜作りとその野菜を使った美味しい料理が作れる器用な手。

前掛けにはいつも、“みのかも定住自立圏”のマーク。

歌劇団で鍛えられた美しい歌声が自慢♪

若いころに歌劇団で鍛えられた、華麗なステップを踏める足。短くても美しく踊れる。

《プロフィール》

名前：かも美

生年月日：明治30年(1897年)4月1日

年齢：123歳(既婚)

出身地：京都府京都市にある鴨川(賀茂川)河畔

趣味：畑作り、料理(地元のおいしい野菜をよく使う)

好物：山之上の梨、八百津町の栗きんとん、かも丸アイス(いちご味)

特技：歌、踊り

好きな言葉：かもは美しい

## 《かも美の生い立ちとかも丸との馴れ初め》

明治30年(1897年)、現在の京都市にある鴨川(賀茂川)の河畔に生まれる。



かも美が18歳になった大正4年(1915年)、芸能への道を志し、大阪の少女歌劇団へ入団する。愛くるしい瞳で娘役として人気を博し、トップスターの座に輝くかも美だったが、ついに戦争(太平洋戦争)がはじまってしまう。



昭和20年(1945年)、太平洋戦争が激化し、3月10日の東京大空襲につづき、3月13日には、かも美が住む大阪も大空襲を受けた。難を逃れたかも美は、被災した人々を勇気づけるため、歌劇団の有志たちと共に、焼け野原で歌や踊りを披露する日々を過ごす。

しかしその6月、再び米軍が飛来し、空襲を行った。かも美は、この空襲によって歌劇団の仲間たちを失った。

希望を無くしたかも美は、大阪の焼け野原の中で意識がもうろうとなり、力を振り絞ってあてもなく飛び立ったが、岐阜県に差し掛かったところで、ついに力尽きて墜落してしまった。

かも美が墜落した場所は、加茂郡蜂屋村の加茂神社あたりだった。

この頃、蜂屋村の瑞林寺には、都会（主に名古屋圏）から、たくさんのおともたちも疎開していた。

かも丸は、自宅で採れた里芋や野菜を、時々瑞林寺にいるおともたちに届けており、この日も蜂屋へ向かっていた。その道の途中、かも丸は、気を失って倒れているかも美を発見する。

かも丸はかも美を背負うと、瑞林寺まで連れて行き、一生懸命にかも美の看病をした。そのおかげでかも美は一命をとりとめ、やがて疎開しているおともたちとも遊べるようになるまで、回復することができた。



やがて戦争は終わり、疎開していたおともたちは、それぞれの故郷へ帰ったが、行く当てのないかも美は帰ることができずにいた。生まれた故郷へ戻ることも出来たのだが、かも美は、かも丸の優しさや心の大きさに惹かれはじめていた。そしてかも丸もまた、京都訛りの心優しいかも美の存在が、忘れられなくなっていた。

そんな中、昭和25年（1950年）、坂祝村深田が太田町に分離合併して以来、市町村合併（昭和の大合併）が進み始め、かも丸はその調整を図るため加茂郡町村内を走り回った。



そしてかも丸の苦労が実り、昭和29年（1954年）に、太田町をはじめとする8町村が合併し、美濃加茂市が誕生した。

大仕事を終えたかも丸は、かも美にプロポーズし、かも美はこれを受け入れて、ふたりはめでたく結婚する。



そして<sup>げんざい</sup>現在。

京都で生まれ、<sup>とかい</sup>都会で<sup>はな</sup>華やかな生活をしてきたかも美であったが、かも丸の<sup>つま</sup>妻となつてからは、畑仕事に<sup>せい</sup>精を出す日々を<sup>す</sup>過ごしている。

かも丸に<sup>つねづね</sup>常々言われている「<sup>たがや</sup>国づくりは<sup>はじ</sup>土を耕すことから始まる」という言葉を受け止め、女性<sup>めせん</sup>の<sup>けんい</sup>目線から<sup>けんい</sup>圏域を支えていくため、若いころに<sup>とかい</sup>都会暮らしで<sup>けいけん</sup>得た経験を、この<sup>けんい</sup>圏域づくりに<sup>やくた</sup>役立てたいと<sup>かんが</sup>考えている。



おまけ

平成 24 年 (2012 年)。

「イメチェンで<sup>かみがた</sup>髪型を変えてみました♪」(マンガ「かも美、<sup>びやういん</sup>美容院に行く」より)



※このお話は、<sup>しじつ</sup>史実をもとにしたフィクションです。